



自問教育の会

EOSA Education of Self-Asking

発行日：2019（令和元）年8月1日 No.12

発行者：自問教育の会（会長：小林慎一）

編集：自問教育の会事務局（丸山 白澤 吉川 牧 北村 新津 松島 市川 宮沢 井口 片岡）

事務局：〒399-8601 長野県北安曇郡池田町池田3210-1 池田町立高瀬中学校内 丸山 博

連絡先：Tel0266-52-0908 Fax0266-52-0917

URL：http://jimon.3zoku.com/

問い合わせ：http://jimon.3zoku.com/php/sformmail.html

第27回全国自問教育の会 報告

会場：長野県松本市立女鳥羽中学校

研究テーマ

「体験と振り返りを往還しながら、主体的に道徳性を高めていく子どもの育成」

平成30年度 第27回全国自問教育の会が、長野県松本市立女鳥羽中学校を会場として、11月30日（金）12月1日（土）の2日間、開催されました。全国各地より52名の参加者があり、清掃参観、授業研究会、実践交流会を通して、議論も深まった2日間となりました。

【1日目】

- 授業参観（2年2組）
道徳 主題名「自問の心」
指導者 平田治先生
授業者 楠田美由紀先生
- 清掃参観
- 開会行事
- 授業研究会
- 実践交流会 I
「自問清掃に取り組み始めて1年間の実践報告」
長野県茅野市立湖東小学校 井口大輝先生
「学年黙想の姿から」
長野県上田市立塩田中学校 飯田大輔先生
- 実践情報交換
長野県城南小丸山先生、長野県塩尻中宮川先生
長野県安曇養護学校宮下先生、
長野県丸子北小飯田先生、長野県中洲小美齊津先生
静岡県賤機南小野澤先生
- 情報交換会（居酒屋しんざん）

【2日目】

- 講演
「中国人と掃除道」フリーライター 山本健治先生
- 実践交流会 II
「自問集会について」
石川県野々市市立野々市中学校 村井登志彦先生
外山祥吾先生
「自問ノートで個々につながる」
長野県南木曾町立南木曾小学校 津浦和幸先生
「掃除前の講話の実践」
長野県佐久市立野沢中学校 宮澤永先生
- 実践情報交換
宮崎県宮崎西中本田先生 岡山県久米中長野先生
栃木県小山中渡辺先生、飯嶋先生
広島県広島大学4年佐々木さん
長野県山ノ内町立南小太田先生
まとめ講評 淑徳大学人文学部 土井進先生
- 実践交流会 III
「改めて自問清掃を問う」
長野県立科町立立科小学校 北村和行先生
「幅広い共通理解を目指した実践事例」
山口県山陽小野田市立厚陽中学校 青木由起子先生
高下悦子先生
- 実践情報交換
静岡県浅羽北小花嶋先生 長野県北相木小龍野先生
栃木県下野市教育委員会星野先生
栃木県絹義務教育学校鈴木先生
愛知県成岩小緒方先生
まとめ講評 平田治理事

参加者の声

東京都 D 先生

山口県、栃木県、大分県、宮崎県、岡山県、広島県、愛知県、静岡県、石川県、東京都、長野県から50名を越える教育者が「自問教育」の道、道徳教育との関わりの探究を求めて集まっておられる真剣な学びの場であった。竹内隆夫先生が創始された「自問清掃」が平田治先生の「実践と理論」の体系化の努力によって全国に着実に広がっていることを目の当たりにしました。

岡山県 N 先生

女鳥羽中学校の自問の様子。自分の学校にはない様子が多々見られて、こんな姿にしていかれたらいいなと思いました。授業もみせていただきありがとうございました。普段からの生徒への接し方や学級経営から、何か心の温かさを感じるような授業で、みていて大変感動しました。

いろいろな学校の先生方が悩まれながら、自分に問いかけながら取り組まれていることがこういう場で共有できることが大変光栄でした。ここで学んだことを学校に持ち帰り、自校の自問清掃をさらに確立していきたいと思いました。

山口県 K 先生

清掃前の話など、とても参考になるものばかりでした。心を落ち着けてから、スタートすることは大切だと思いました。

素敵なお話をありがとうございました。「これぞ自問をしているクラスよね」と思わせる暖かい空気の流れる授業でした。研究会もいろいろとお話が聞けてよかったです。

いつも勉強させていただきありがとうございます。

静岡県 H 先生

生徒・教師共に自問清掃に取り組む姿が美しく輝いていました。担任が、いかに子どもを理解し、

信頼関係ができている学級づくりが大切であるかを改めて実感しました。初めて出席、参観して、自問清掃という同じ志をもった人達が実践を交流し、とても勉強になりためになりました。

栃木県 W 先生

初めて自問清掃を参観させていただきました。衝撃を受けたと同時に、どうやって本校で取り組んでいくかを考えると何か楽しくなってきました。

授業の雰囲気は全てだったと思います。授業者と生徒がフラットになっている様子こそ自問教育の成果だと思います。

各学校でその特性に合わせてながら独自の自問清掃に取り組んでいることがわかり、大変勉強になりました。苦勞している面やどうやったらと考える姿に本気で自問教育に取り組む姿勢を感じ、やる気が出てきました。来年も是非参加し、勉強させてください。

長野県 I 先生

中学生の自問と向き合う姿勢に感動しました。自分の担任している6年生のクラスでも自問清掃をしていますが、もう一つレベルのちがったものを見せていただいた気がします。学校に帰って、子どもたちに話してあげたいと思います。

教室の空気の温かさ、そしてその中で自分の思いを素直に語りつづやく子どもたちを見せていただきました。道徳の時間の中で、子どもはもちろん、先生も共に悩み考えながら進めていくアクティブな学びだったと思います。自分のクラスも温かく語り合える、学び合えるクラスにしていきたいと改めて感じました。

県外の先生方の実践を聞いて、長野県だけでなく、全国で自問が広がっていることを知りました。熱心な実践をされている先生方のお話を聞くと、自分もまだまだ足りないものだらけ、もっとがんばらなければ、と感じました。

第28回全国自問教育の会 開会決定!

体験と振り返りを往還しながら主体的に道德性を高めていく子どもの育成
～自問活動による道德教育～

期日 令和元年11月29日(金) 30日(土)

会場【1日目】長野県立科町立立科小学校

授業参観, 清掃参観, 実践交流会 I



13:10 13:30 13:45 13:55 14:40 15:00 15:30 16:30 17:40 19:00 21:00

受付	清掃参観	参観授業	開会行事	授業研究会	実践交流会 I	移動	情報交換会	第2部
----	------	------	------	-------	---------	----	-------	-----

【2日目】佐久平交流センター (旧佐久勤労者福祉センター)

実践交流会 II, III など

9:00 12:00 13:00 14:40 14:50

受付	実践交流 II	昼食	実践交流 II	閉会行事
----	---------	----	---------	------



申し込み, 参加費等の詳細は, 自問教育の会HPより要項をダウンロードできます。

jimon.3zoku.com/

本年度も全国各地より先生方が集まり, 熱い2日間になることを期待しております。

新企画

道徳の授業実践から学ぶ

子どもの作文を使ってどのように道徳の授業をしたらよいかわからない...という声を聞きます。実践されている学級を実際に訪れて学ぶのが一番ですが, なかなかそれも難しいものがあります。そこで, 授業記録に考察を加えたものを紹介することで, 少しでも先生方の参考になればと思いこのような企画を掲載することとしました。

「道徳」授業としての自問授業(1)

授業者: 片岡聡矢* コメント: 平田浩**

教科化された道徳の授業研究が盛んになっているようです。自問清掃実践者は, 子どもの作文(生活文や自問ノートなど)を教材にして, 道徳授業(自問授業)を仕組もうとすることが多いでしょう。また, そうでなくてはならない。自問教育は掃除活動とリフレクション(反省, 自己省察, ふり返り)とを往還させながら進めていくことが特徴ですから, 掃除だけでなく個人・集団によるリフレクションの場を設けることは当然だからです。しかし様々な理由から, 自問授業を実践できない人も多いようです。そこで, 授業実践事例にコメントを付して例示し, 参考にしていただこうと考えました。

授業者による解説	コメント
<p style="text-align: center;">5 学年 2 月の実践（自問清掃導入から約 4 ヶ月後の授業）</p> <p>1 本時に至るまでの経緯と教師の願い</p> <p>担任は、5 年生の 4 月に子どもと出会った。自己を表出することが苦手な子が多い学級であった。子どもが心を開き語り合うこともできるように授業の中で、学び方の指導もしてきた。その結果「わからないことをわからないと言えたり、わからないことを質問したりできるようになった」と子どもも自分の成長を感じ始めている。1 2 月に A さんは、1 月に 1 度ぐらいの頻度で、自己の成長を振り返り記述する「成長ノート」に以下のような作文を書いた。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>私は、5 年生になって少しはがまんをするということが少しずつ増えてきました。たぶん、そうじてやっているがまん玉、親切玉、発見玉の 3 つの玉のおかげだと思います。でもまだ、がまんをすることができなくなってしまうことがあります。（ケンカなどでは、つい強い口調になること）理由は、ケンカだと相手も強くなり、泣いたりすると、他の人も入ってくるから、口調が強くなってしまふんだと思う。でも、紙上討論をやってから、だんだんケンカもなくなってきました。授業などでも、わからないところは、しっかりとわかるまできけてきたけど、まだ、きけない自分もいる。きいたとしても、まだわからないのに、「ありがとう」と言う自分もいる。心にある何かじゃましてるのか、自分自身の気持ちにあるのか、でも、前よりも、もっときけるようになった。次への一步を踏み出してがんばりたい。（3 学期）</p> </div> <p>A さんは、自問清掃の取り組みを始めとして、学級での生活を通して自分の素直な気持ちをきちんと伝えながら生活することの大切さを感じ始めている。でも、自分が発信するばかりでなく相手の気持ちを思いやる心がないと成立しないことにも友だちの関係性の中で学んできている。A さんの成長の姿は、クラスの友だちも実感しているところであり、その A さんが自己の成長と課題を素直に綴った作文に触れることで、クラスの課題でもある真理を求めて自分の思いをしっかりと伝えることができないうことについて意見を出し合い、問題を解決したり、より良いものを求めたりする時には、時として言いたいことも言える関係性が大事であることに気づいて欲しいと考えた。また、そうできない自分たちのクラスの実情をどう乗り越えていくのかについても考えを広げて欲しいと願った。</p> <p>2 授業における子どもの反応と考察—A さんの作文を読み、気づいたことを伝え合う場面—</p> <p>最初、友だちに質問をして教えてもらう時に、わからないけれど「わかった」と言ってしまうことに共感する発言が続いた。</p> <p>B 男さんが</p> <p>「ありがとうって言っちゃう理由は、せっかくがんばって教えてくれてるのに、どうしてもわからないっていう自分がいて、それがちょっと気まずくなってわかったって言っちゃう。」</p> <p>とつなげて発言した。</p> <p>この発言を契機に、しつこく質問するのは相手に失礼である…という発言がづながっていく。</p> <p>さらに B 男さんが発言し、以下のように話がつながる。</p> <p>B01：「えっと、今の話と変わっちゃうんだけど、この部分だと、ケンカが悪いみたいに書いているけれど、ほくは、ケンカが悪いことだとは思いませんでした。」</p> <p>T02：「ほー、ちょっと聞いてみたいね。D 男さん」</p> <p>D03：「B 男さんに質問で、何で悪いと思わないんですか？」</p>	<p>教師が子どもの作文を読むという行為は、子どもの心の声をききわけることであり、「対話」することである。対話しながらいずれかの表現に心が惹かれて、そこに道徳的な価値を見いだす。それが今の子ども達の状況と適合すると判断できれば、子どもの作文は教材となり、授業の目標も決め出すことができる。</p> <p>教材化の過程では、分析的な見方も必要となる。この作文は、書かれている内容が大きく 3 つの部分から構成されていることを理解しておかなくてはならない。</p> <p>①冒頭の「私は、」から「ことがあります。」まで。②「(ケンカなど……)」から「あるのか、」まで。③「でも、」から「がんばりたい。」まで。</p> <p>①と③は対応しており、中間の②の部分で具体的な事例や状況が述べられている。したがって、この作文の主文は①③であり、そこに追求すべき道徳的な価値がある。別言すれば、②の扱い</p>

B04：「逆にケンカがないっていうクラスは、なんか全部、その、あの、全員が一方
向に向かっていて、対立とかしないから、ずーっと同じような我慢している人とか
いるし、そういうのはなくて、たまには自分の意見を友だちにぶつけた方が絶対に
いいクラスになると思うからケンカは悪い事じゃないと思いました。」

T05：「質問したいの？はいどうぞ。」

A06：「何でその考えが浮かんだんですか？」

B07：「えっと、前になんかそういう本があって、その本を読んでこうだな、こうだ
なと考えたことが今、この文を読んで思い出したので言いました。」

A08：「それは、何の本ですか？」

C09：フフフ（笑い）

B10：「確か、乾杯シリーズの、けんかに乾杯です。」

C11：「あ〜」

T12：「えっ、知ってるの？」

C13：「読んだことない…」「読んだことないけどみたことある。」「図書館にある」

T14：「えっ、今の意見については賛成なの？みんな？」

C15：「言われてみればそんな気がする」

T16：「B男さんが言っていることで大事な事って何だろうか？」

T17：「劇やっていたじゃんね。同じ方向向いてないとまとまんないんじゃないの？」

C18：「う〜ん」

T19：「ぶつけあうのとか、同じ方向向くのとか」

F20：「わかんない」

A21：「今先生が言っていたみたいに、劇みたいに、みんなで協力し合ってやるもの
は、けんかがない方がうまく進むと思うけど、なんか前B男さんが言っていたみた
いに、ふつうで、劇とかやらなければ、ケンカをしてもいい。」

この後、わからないのに「わかった」「ありがとう」というのは逆に失礼なのか
も知れないという話につながっていく。

B男さんは、友達の話を受けて次のように語った。

「それ、その場しのぎみたい。また、それをわかりやすよとかウソをついて、他の人
に教えてって言われて、そのやり方を教えたら、その人が正直者とかでちょっと分
かんないって言ったら、「え」と思って、逆に前の子の時は分かってくれたのに、何
で分かってくれないんだと思って、逆にその子が…わかんない…この先…」

【考察】

○B男さんは、友達と伝え合う中で、自分の考え方と友達の発言を比較し見つめ直す
ことで、少しずつ自分の考えを変えていった。授業の前半では、B男自身は教えて
もらった時にわからなくても気まずくなるから「わかった」と言ってしまう自分
について発言した。Aさんのケンカを克服した叙述からケンカすることも大切だ
という今まで得た知識が触発され、最後は、その場しのぎの言葉は相手に対して誠実
で無いことに気づいていった。B男さんは、本時のような伝え合いの学習を繰り返
す中で、友の言葉に耳を傾け、ありのままの自分を語る学習に充実感を感じ、最近
では、思いついたことだけを反射的に話していた自分から立ち止まって考えるこ
とのできる自分へと変化してきているという自己成長感を感じているようだ。

○D男さんは、B男さんの発言に対して質問をしている。F女さんは、素直にわから
ないと言っている。このように、友達や先生の発言について、納得いかなかったり
もっと知りたかったりする場合には、発言に対して問い直すことを普段の学習の
中でできるようにしておく必要がある、それができることによって、子どもの作文
を教材とした伝え合いの学習が成立し、その中でそれぞれの思いが広がり深まっ
ていくことになる。

方如何によっ
て、①③の持つ
価値が深まるど
うかが決まる。
具体的には、②
の「わからない
のに」「心にある
何か」の箇所を
問題として扱い
ながら、①「でも
まだ」か③「次へ
の一步」という
大きな問題へと
つなげればよい
のではないか。

授業は主に②の
「わからないの
に」という辺り
を中心に展開さ
れ、「ありがとう
と言うべきかど
うか」が話題の
中心であった。
但し別な方法も
考えられる。例
えば「じゃまし
ている何かと
は？」というよ
うなとりあげ方
もできるだろ
う。いずれにし
ても、教師が現
前の子ども達に
即して、なにを
どう深めさせたいかに依る。

授業は、①③に
つなげるような
教師の問いかけ
が行われなまま
終わってしまった。
教材解釈
不足と展開構想
の甘さがあった
が、互いの体験
や想いを交流す
る日常的な活動
や授業を、継続
的行うことの
重要性が再確認
された。

実践の中で

自らを高める自問教育



竹内隆夫先生

の手引き

新たな発想による清掃活動

—人としての成長を願って—

竹内 隆夫 著

<目次>

すいせんの言葉(第4号掲載)

1. 実践の場こそ(第4号掲載)

2. 紆余曲折を経て(第5号掲載)

3. 自由とは迷惑をかけないこと“人の痛みがわかる”(第6号掲載)

4. 心を汲む気働き“人の心がくめる”(第7号掲載)

5. 創造と発見“人のねうちがわかる”(第8号掲載)

6. 感謝の心で自分との違いか許せる”(第9号掲載)

7. 正直ということ“胸に自分なりの尺度ができる”(第10号掲載)

8. 教師のあり方(第11号掲載)

9. 理念の背景(第12号掲載)

あとがき(第12号掲載)

(まとめてお読みになりたい方は、事務局までお問い合わせください)

9. 理念の背景

今は多くの県の小中学校で試みられています
が、私がこの案を学校ぐるみで取り組んだのは、
K中学校で校長の職にあった最後の2年間です。
最大の万引き事件の直後で、学年末にはほとんど
授業にもならない状況でしたから、父母にも先生

方にも混迷の色はかくせませんでした。・それが1
年で真面目学校に変わったことから、駆けつけた
新聞記者のOさんから、「竹内さん、生徒にどんな
薬を飲ませたんです？」と尋ねられました。また
当時の教育委員長のS先生からは「竹内さんのや

り方は一口で言えば生徒を絶対信頼するというプランですなあ」と申されました。そう言われればたしかに的（まと）を射たお言葉でした。

後にこのプランに対して、読売新聞社から、生徒指導での最優秀賞という大きな賞をいただき、高円（たかまど）宮さんや、選考委員長の波多野先生から、身に余るおはめの言葉をいただきました。その後、多くの先生方から「どういうことから考えつかれたのか、その発想の原点は何ですか」などと尋ねられるようになりました。

そこで最後に、この案が組み立つまでの過程をふりかえり、理念の背景となったものを大まかに述べさせてもらうことにします。

まず第1は敗戦のショックでしょうか。過去の国家体制が崩れ、与えられた民主主義というものへの疑問でした。抽象的には誰もが自由だ平等だ博愛だと騒いでいましたが、私にはなぜ自由なのか、平等とは何のことか、その真意はつかみにくかったのです。これからの日本が民主主義の国として生まれ変わらなければならないとしたら、そこにこれまで以上の理念が無ければならないと思いました。

にもかかわらず、戦後の混乱期にはみるみる自由のはき違え、平等のはき違えが広がりました。そしてこのままでは危いと思いました。もはや今の大人には民主主義などというものは担う資格が無いのではないか。せめて次代を担う子供達にその真意を理解させなければ—と思ったのです。

そして子供達に今はまだ本物の民主主義でないこと。君たちこそ将来これを本物にして担っていける力を身につけてほしいと訴え、自由と平等についての私なりの考えを説き、体で実践できる子供にしようと思いました。そのための方法として社会生活のミニ版である清掃活動を選んだのです。このプランではそれを第1と第4の段階に位置づけました。

戦後の過保護が裏目

次に今の子供の生活態度を見て、気がかりなのは、意志力、即ちがまんとやる気が乏しいことでした。困苦欠乏に耐えさせた戦時中とは逆にあって過保護に育ち、依頼心が目立ちます。まず意志力の重要性に気づかせなければなりません。たまたま脳生理学の時實先生からお手紙でご指導をいただいた人と動物との違いからの説明がよからうと思い、生徒に理解しやすく図解して扱いました。

意志力は創造性や情操と共に人間だけに与えられた才能であること。14歳をピークに後天的に本人の努力によって発達し、20歳を過ぎては手遅れなこと。3つのうち、意志力の大切さはあまり気づかれていないが、きわめて重要なことなどを朝会で7回に亘って説明しました。

それまで清掃は人からさせられるものと受けとめていたが、がまんもやる気も意志力を強める自分自身のためにするものだ—と受けとめるようになったのです。

続いて情操の細胞を発達させるには、人の気持ちを汲みとる気働きや感謝の心で働くこと、裏表のない正直な生き方が大切なことを理解させ、それぞれ清掃活動の中へ組み入れました。情操は音楽や美術で育つと思われていますが、コンクールや作品主義が流行する中では、かえって利己主義になりやすいでしょう。むしろ清掃活動の中で心遣いで養われるものと考え、それぞれの段階に位置づけました。

創造性もつめこみ勉強の中では育ちようがありません。進んで仕事をさがそうとする清掃活動にすれば、はるかに期待が持てると考え、第3段階に位置づけました。

このように各段階で前頭葉を刺激するならば、人間のよさが開発できると判断したのです。従っ

てこのプランの構造化には、時實博士のご指導に負う所がきわめて大きいのです。

また現代っ子は主体性に欠け、流行に流されやすいことです。あこがれのスターが屋上からとびおり自殺をとげると、数十人もの若者がこれを真似てしまうのです。今は自分の中かけがえのないよさを見だし、心に尺度を持った人間にすることが急務であろうと思うのです。自分の中に生きるよりどころを見だし、自らに問うことの楽しさがわかる子供にしなければなりません。それによって生きる喜びが湧いてくるに違いないと思うのです。このような生き方は、私が長くご指導をいただいた哲学会の 会長をされた京都大学の井島勉先生のご教示によるものです。

ある日先生との会話の中で、「竹内君、美術の先生方の中には児童画を見てその心理的背景を探ろうとする人が多いが、美術教育の理念を人生の生き方としてとらえるには、心理学は万能じゃないんだよ」と申されました。今日教育界は心理学に依拠する風潮が強いが、生きることの自覚を持たせるには、もっと前向きな発想が必要であろうと思うのです。私がこのプランを立てるにあたってその根拠を、美学及び脳生理学に求めた背景にはこのような事情がありました。

捨てる勇気が好結果

次の課題は今の日本の学校に競争あって教育なしと言われる状況にどう対処したらよいか——という問題でした。物を扱う経済界からの発言によって、しばしば競争原理の導入が当然のように言われます。学校経営に競争が導入されることと、指導に競争を用いることとは厳しく区別されなければなりません。

学ぶ喜びは人と競争する中から生まれるものではないからです。そのような考えから各教科のどこに学ぶ喜びがあるかを見いだすことが、私に

とって長く懸案となっていました。そして生徒指導における勤労の中に働く喜びを見いだすことは、最も至難な課題となったのです。そして勤労の中で子供がきらう苦痛の条件を次々に取り除く作業に長い年月を費やすことになりました。

こうして最終段階に至って、作業の中へ自問のゆとりを導入してみようという発想が浮かびました。私のプランに対して新潟県のN氏が「ジャコメッティーの彫刻ですね」と言われました。不要なものを一切除いた時、最後にはほっそりとのこったジャコメッティーの彫刻を見る姿に例えてくれました。ふりかえれば発想法の中の消去法でしょうが、それには何よりも捨てる勇気が必要でした。

そうは言っても、このめざましい受験競争の中へ、生徒指導などを取りこもうとする学校は、きわめて少ないのです。都会では学校から塾へ直行する孤独な戦士達が深夜の電車に殺到し、テストの点さえよければ、人間性はどんなにいやしくても、すべてを許そうとするほどゆがんでいます。

だが、この崩れは天災ではありません。教育という美名にかくれておとな達が生んだ就職競争にほかなりません。あまりにも悲惨です。点数を競ういわゆる優等生の高慢な鼻を折らないことには、人の価値は見えてきません。そこでこのプランの第2段階で、人の心を汲む気働きを学力より優位なものとして位置づけました。

これによって学習での劣等意識は減少し、優等生から優越感が消えたのです。やがて公德心や福祉の心へと望みをつなぐことができました。

指導要領も、勤労作業を特別活動の末席に加えて置くのではなく、教科指導と対等に位置づけるほどの見識を示すべきでしょう。気働きを育てるこの段階こそ、人間性回復の試金石なのです。

第4は、可能性を信じ、あくまで待ち続けることにした——という問題です。私どもは「教育は

師弟の信頼によってなりたつ」と言います。たしかに親子の間も、父母と教師の間の信頼も欠かすことはできません。

しかし、信頼していたつむりの生徒が信頼を裏切り、非行を犯した場合に、私どもは、どこまで信頼をかけ続けられるでしょうか。この頃は生徒が死を選んだりすると、例外なく学校側は「あの子がそんなことをするとは信じられません」と弁解します。殊に非行の多い昨今は、信頼など崩れ放題ではないでしょうか。

ところがペスタロッチはこう言います。「もし教師の信頼を裏切り、非行に走る子供が現れたら、それを子供のせいにしてはいけない。その子へのこちらの信頼のかけ方がたりなかったからであると思いなさい。教育における信頼とは裏切られた子供に、より厚く信頼をかけ続けることです」と。この教育哲学では絶対に責任をまぬがれることのできない親の愛に等しい一種の賭けなのです。

もし賭け続け得ないようなら、軽々に信頼など口にする資格はない、というほど厳しいものです。このプランの成否の鍵も、実はその厳しさにあります。こちらから「一切の指示命令をやめます」と宣言したのは、まず生徒に全幅の信頼をかけたことなのです。

中には、もう叱られることはないから、ずる休みができる、と考える者もいるでしょう。善も悪もすべてを包みこもうとする発想の原点は、そのペスタロッチの思想にあやかって生まれたものです。ずる休みを続けたならば、その生徒こそ、これまでの接し方の問題の根深さを示すものとして、自問のゆとりを与える必要があると思うのです。

第5は、いやいやながら働くのではなく、心の成長をはかるには、愛校心が伴わなければならないことに気づかせ、学校に対する感謝の思いをた

しかめさせようとなりました。古来、親や教師への感謝の教育を指導計画に位置づけていない国はありません。たとえ道德の時間が特設されていない国でも、このことは重要に扱われています。ところが、わが国は戦後、道德が特設されるまでの間、むしろその扱いさえタブー視されていました。

今はそれが徳目のひとつとして加えられはしたものの、自らに問い、この有無を吟味にかける扱いになっているとは思われません。これこそ戦後における教育の落とし穴ではなかったでしょうか。この発想が加わることによって、生徒は明るい表情で働くようになりました。

私は僧堂での体験から、感謝の思いを第4の段階に自問のかなめとして位置づけることにしました。やがて自省しながら働くことによって、働くことの意味とその喜びが汲みとられるようになりました。漁村の父親が、わが子から、「お父さん、僕働く意味がわかったからお父さんの後を継ぐよ」と言われて感動する事例も生まれたのでした。

裏表のない正直な心を

第6は、この案の到達目標である裏表のない正直な心の持ち主になることを目指しました。終戦直後、正直に生きぬこうとして、ついに栄養失調となり、命を落とした一人の判事さんの死によって、日本からこの崇高な徳目は消え去ったのではないのでしょうか。

皆がヤミ米を食べヤミ値の生活が、むしろやむを得ないこととして、生きねばならなかったからでしょう。数年前に全国の校長経験者から、「家庭で身につけてほしい資質はなにか」という問のアンケートを求めました。それによると、多い項目の順に1が節約、2が礼儀、3が情操、4が自制心、と10数項目をあげられていましたが、「正直」な子という願いはありませんでした。15番目に、人

に対する「誠実」はありましたが、自分に対する「正直」は無いのです。また文部省が示した20余の道徳の徳目にも、正直がまともには取り上げられていません。これほど、自分の心を問う姿勢は気づかなくなっているようです。

私はこれこそ人間教育の集約点であろうと考え、胸に判断の尺度を置こうとしました。人の生き方としてこの大切さを知ったのは私自身の美術の勉強に基づくものです。かつて内地留学生として美術学校で絵を描き彫塑の勉強をさせてもらいました。絵では本物の色と違った色で描いたりします。それは目で見える通りの色よりも、心に感じた色で描く方がより心に正直だからです。

私が描く場合も時流を追わず、心に感じたままになるべく正直になろうと心がけます。幼児がお母さんの絵を描くと、顔ばかり大きく描いて皆が笑います。けれどもこれも心に感じた通りの大きさを描くからであって、かえって心には正直な絵ということでしょう。人間はこのように心を持っていますから、心を尺度にすれば、その方が正しいと言えます。

中国の孔子も最高の生き方を心のままに歌う

音楽だと答えています。つまり人間が人間らしく生きるということは、自分の心を尺度に正直に生きるということに尽きるでしょう。殊に西欧のようにバックボーンに神に誓って不正に組みしなないキリストの教えがあるわけではありません。しかし祖先は見事に朝日ににおう山桜花に例えていつわりのない心を現しています。人が見ていなければ怠けたり、悪いことをする人は、心の尺度を失っているからです。

清掃中、先生が見ておられればよく働き、見られなければ怠けるのも同じです。いつも自分の心に尋ねながら正直に生きるようになれば、他人の目を気にせず堂々とくらせましょう。

つまり芸術家のように心に素直に生きるさわやかさを実感させたいのです。そのために、先生の前でも堂々と休んでよいことにしたのです。若い日に、この生きざまのさわやかさを味わったならば、恐らく3つ子の魂となって生き続けるでしょう。事実自分の心を尺度とするこの段階に至って、非行はぬぐったように消えました。

こうして1年で真面目学校と言われるまでに生まれかわったのです。

あとがき

わが国の教育の根本のま違いは、指導要領が改訂されるたびに、低学年からの注入量が多くなったことでしょう。しかもこれに法的拘束力を持たせたため、子供達は学ぶ楽しさよりは、つめこまされる苦しさの方が上まわってしまったことです。

このことは米国との比較調査でわかります。米国の子供は学年が進んでも教科への興味がさほど減らないのに、日本の子供は学年毎に大幅に興味が衰えるのを見れば明らかです。こうして多くの学生達の学ぶ目的が学問でなく、入試突破の技

術だけとなっています。こうして入試から解放された大学生の多くは、レジャーやまんが本に走る異常さを生んでいます。

学生の理工系離れが問われていますが、理工に限らず全教科がすでに魅力を失っているのです。このことはひとり学生の悲劇であるばかりでなく、文化の国を目ざそうとした国のビジョンから見ても大きな損失でしょう。

このようになった理由のひとつは、指導要領改訂にあたって文教府が経済界や学会からの要求だけを受け入れてきたからです。もっと子供に責

任を負う現職の発言や教育学者の声に耳を傾けるべきで、文教府の識見と責任が問われるべきでしょう。

生涯教育を言うならば、義務教育段階ではつめこまされる苦しさが学ぶ楽しさを越えてはならないと思います。

また、テストのほとんどは知識量をはかろうとしており、人を育てることなのに物を扱う経済競争の原理を導入したため、学園は選別機関と化したのです。加えて改訂のたびに大切なイマジネーションや創造性を育てる情操教科を削減しました。

社会は実践力のある人を求めているのに、教室からは頭でっかちの口達者ばかりが育っています。道徳の授業がほとんど成果をあげ得ないのもそのためです。当然の結果として子供達は孤独な

戦士となり、友情は衰え排他的となり、いじめや不登校が急増したのです。

この現状を救い人間性を回復するためには、枠ぎめされた教科以外の清掃時間を選ばなければなりません。しかし、清掃という働きによって人間性を向上させることも、そう容易ではありませんでした。長い曲折の末に辿り得た一里塚でした。

学校が子供達にとって楽しい学園となるためには、まだ幾多の課題が残されています。このささやかな試みに最後まで関心をよせられた読者の皆さんに心からお礼を申しあげ、むすびといたします。

平成6年7月

《編集後記》

「先生、こんなことを発言したのは初めてです。今日の授業、すごく楽しかったです。」

子どもの作文を活用した道徳の授業後、子どもが私の所へやってきて語った言葉です。この子の言っている「こんなこと」とは、自分の心の中の弱さやずるさも含めた本当の気持ちのことです。強さと弱さの葛藤の中で子どもも日々生きているのです。今まで心の中にしまい誰にも語らず、取り繕うように語ってきた虚飾がはがれていき、素直な心でクラスの子どもや自分自身と向き合い、友とそのことを語り合ったことへの確かな実感をその子は感じていたのです。

議論する道徳という言葉だけが独り歩きし、議論する方法を学ぶような方向にいつまわっている研究会などにも参加したことがあります。長いこと道徳教育に関わってきましたが、子どもが道徳の時間で語る事の意味を学ぶことのできるのは、自問教育の会が最適であると確信しています。この会を経て、教師としての意識改革をし、子どもと向き合える教師として再生していった先生を何人も見てきました。子どものことを信じて待つことのできる教師に生まれ変わることができるのです。

今回、授業記録を会報で紹介するという新たな試みをしました。授業づくりで迷われている先生方への一つの指針となれば幸いです。今後も、実践を起こしては、紹介していくような活動も行っていければと、事務局内で話題にしているところです。今後の活動にもご注目ください。

(文責：長野県茅野市立湖東小学校 片岡聡矢)